

OMC事務局 〒560-0085 豊中市上新田4-16-1-33 合原 一夫 TEL06-6833-9227
 広報編集局 〒573-1171 枚方市三栗1-18-20 前田 茂夫 TEL072-850-5781
<http://www.ne.jp/asahi/smaeda/12/>

平成14年12月(2002年)No. 444

コンテスト入賞の知らせ続々と・・・ 今年は13本の好実績

昨年は年間8本の入賞実績でしたが、今年は12月3日現在で既に13本の入賞を果たすという全国レベルのビデオコンテストの実績でした。OMC会員諸氏の日頃の研究熱心が実ったものといえ、嬉しい限りです。来年もこの勢いで少しでも良い作品を目指して、より質の高いOMC映像フェスティバルにこぎつけたいものです。

■ビデオコンテスト入賞おめでとうございます。

- ①ビデオサロン「全国映像コンクール」
 入選 「妹夫婦のお引越し」 安居良枝さん
- ②第13回大韓民国V I D E O大展
 入選 「ネパール紀行 国を失った人々」 西村光雄さん
- ③第17回愛媛ビデオフェスティバル2002
 奨励賞 「ナマステ(こんにちわ)」 有村 博さん
- ④アストロデザイン・ムービーコンテスト2002
 (幕張メッセ国際放送機器展会場)
 審査員特別賞 「ニュージーランド紀行」 有村 博さん
- ⑤和歌山県アマチュア映像コンクール 県視聴覚教育連絡協議会
 会長賞 「熊野古道幻想」 岡本至弘さん

■12月例会と作品研究会は梅田の駅前第2ビルで、お間違いなき様に。

12月例会と作品研究会は第3土曜日21日 梅田の生涯学習センターで

12月例会は恒例により第3土曜日21日18時より、同作品研究会は13時30分より、新設された梅田の駅前第2ビル5階の生涯学習センター、第6研修室で開催します。ナショナルの新型プロジェクターのテストも兼ね世話役の皆さんに確認の上、例会場として定着化を決定しますので、世話役の皆さんは勿論、多くの会員さんが研究会から出席されますよう希望します(参加費無料)。研究作品、例会作品共ぜひお持ちください。今年最後の行事です。楽しく今年を締めくくりましょう。

とは名ばかりのぬかるみを悪戦苦闘。揺れる車に、たいへん体力の要る取材だと思った。標高4700メートルにあるナム湖は「ラマ教の聖地」とテロップにある。ケルンのような石積みや経文を印した旗(タルチョ)はチベットのいたる所に存在する。神秘的なナム湖の岸辺にも数箇所で見られたが、そこに人影はまったく無い。柴を背負った少年、羊やヤクを追う遊牧民、洞窟寺院で読経する僧侶たちが断片的に出てくるが、それらの人々がこの湖と宗教的にどう関わっているのかは素材不足でよく判らない。したがって題名の「天」は神を指すのか、それとも単に高い所という意味なのか、知るのは作者のみだが例会では聞きそびれた。空気が薄く旅行者にとって非常に厳しい環境の中で、これ以上の詳細な描写は無理だったのだろう。現地の曲と思うがソプラノ調の歌が作品とみごとに調和していた。曲と映像のラストを揃えたら、いっそうその効果は上がったのではないか。

3. ふれあいまつり

9分40秒 森 保信さん

作者の近所の公園で催された地域住民参加のおまつり。長い挨拶以外すべて踊りだが、それは「よさこいソーラン」だった。振り付けと衣裳の自由さが若者にうけたのか、ちかごろは急激に全国へ広まっている。かなりハードな踊りだが、少々ご年配の女性も笑顔で澁刺としていたから。傍目で見ると本人たちは楽しく踊っているらしい。省エネに撤したか、それともお疲れか、カメラは広場の最後部にデーンと三脚を据えたまま一步も動く気配がない。ズームやパンだけでは早い動きに追いつけない。アップがない、迫力がない。変化もない。ないないづくしでいつのまにか終わってしまった。

4. 梅小路SLスチーム号

9分58秒 前田茂夫さん

梅小路蒸気機関車館。動態保存されたSLがいつでも見学でき、大人も子供も楽しめるテーマパークになっている。かつて急行列車用に造られたハチロク(8620型)が今は小さなトロッコ客車を牽いて梅小路公園の専用線路をゆっくり走っていた。トロッコ列車は家族連れでいっぱい。大音量の汽笛に、おもわず我が子の耳をふさぐ母親。汽笛の鳴る場所を知っているのか、事

前に耳をふさぐ親子も居たりしてその描写がおもしろい。子供たちの目は輝き、お父さんもお母さんも楽しさを隠しきれない様子だった。誇らしげにつばめのヘッドマークをつけたシロクニ(C62型)とデゴイチ(D51型)の重連運転。その雄姿は鉄道ファンならずとも胸をわくわくさせて見ていたに違いない。鉄道の日を記念した特別演出か、重連の横を並行してマメタンク(B20型)が走っていた。長いあいだ放置されたいたこのSLが動くようになるまでには多数のボランティアの協力があったと言う。作者はそのもようも記録しているらしいので、次回作も期待しよう。

5. 京の染と織

8分10秒 安居良枝さん

京都にのこる伝統工芸は、そのどれもが年配の職人たちによって細々と受け継がれている。本能寺あたりの一画は昔から着物の手工芸が盛んなところだが、需用の衰退で寂れる一方だとか。最近、町家の工房を一般に公開する「本能まちづくり」が始まった。まず作者が訪ねたのは家族だけで支えている工房。図案をもとに下絵を描くどちらかと言へば地味な仕事だが、画面に語りかける主人の表情は熱意にあふれていた。続いて型染の工房。絹地を漆で固めた型紙でさまざまな模様を刷り上げるのだが、まるでレース編みのような細やかな模様に驚いた。問屋さんでは色とりどりの華やかな着物がところ狭しと展示されている。なかでも佐波理綴という見る角度で色艶が変わる袋帯の見事さに目を奪われた。これなどはもう着物の装飾というより美術品だろう。1メートル織上げるのに数か月。着物の値段が高いのもこれを見て納得した。最近の作者は省略の手法を心得られている。それが無駄のないこの作品に顕著に表れていると思う。

6. 毛馬の閘門 8分 安居利次さん

かつて大阪の市域を流れる淀川は、今の土佐堀・堂島川の方角へ大きく曲がっていた。明治42年に氾濫をおこす原因になった湾曲部を真っすぐ大阪湾へ注ぐ(新淀川)ように改修し、そこに水位を調節する水門を造った。それが毛馬の閘門だ。都島橋のすぐもとに川砂利の集積場があり、正午すぎには10隻あまりの運搬船が砂利を満載して帰ってくる。作品では砂利船が通過

する閘門の情景を映しながら、その機能を判りやすく説明していた。パナマ運河のようにポンプは使わず、上下にスライドする扉の前後を閉めたあと、船が進む側の扉の下を少し開けて水位の調節をするのだそうだ。なるほどうまく出来ていると思った。ナレーションで「あの横山やすしがこの閘門を自分のモーターボートで通った」そうだが私は知らなかった。「語り種」にまできているのはなにかトラブルを起こしたのだろうか。

7. バリ島記 9分14秒 今井羨美さん

5月の「ウブドの夜明け」の続編。今回は人々の生活が中心になっていて興味ぶかい。山のとっぺんまで続く棚田は勤勉さを、あぜ道のお供え物で信心深さが判る。「民族風習を知りたいのならまず市場に行け」と言うが、山と積まれた唐辛子見ると庶民の料理は辛いのだと思った。一生懸命にナレーターを努めたお孫さん。その素人っぽさがかえって好感をもてた。しかし「神秘的なウブドの朝は静かで物音ひとつしません」と言うくだりの映像に、にわとりの声は仕方がないとしても音楽はただ邪魔になるだけ。ときにはまったく無音の状態もひとつの効果音と心得ていただきたい。

8. 会津若松鶴ヶ城

4分50秒 有村 博さん

「荒城の月」の歌にのせて、若松城と白虎隊ゆかりの飯盛山を訪ねた旅行記。天守閣は優美な姿をしているが、いつだったか私が行ったときはまだ無かったから最近復元されたのではないか。みやげもの屋の2階で行なわれた女性の剣舞。その背景といえば、ガラスの文字はまだ良いとして、たたんだテーブルに積み上げた座布団、壁にはメニューの一覧が張ってある。およそ舞台として考えられない場所での実にまじめな舞だけに、こっけいを通り越して気のどくに感じた。

9. 自立 9分54秒 合原一夫さん

ドキュメンタリーだ。主人公は作者の奥さんの友人で松尾さん。生け花のお仲間。空気や水を浄化する炭が生活の中にさまざまなかたちで入り込んでいる現在、その炭と生け花を組み合わすのはどうだろう。と、松尾さんはひらめいた。と、同時に作者の取材も始まった。初めは池田産の菊炭と生け花をあしらって、部屋の浄化のがテーマ

だった松尾さんだが、デパートで微妙に曲がった備長炭と出会ってからオブジェとしての考えに変わり、備長炭を求めて自らの運転で遠路紀州の南端へ。ここでも作者は本領を発揮。窯元の主人や真っ赤に燃える炭焼き窯、それを覗き込む松尾さんを確実に撮っている。本来は曲がった備長炭などは作らない窯元だが、念願を実現させるために何度も足を運んだ松尾さん。それに毎回同行したと言うからこの作者には頭がさがる。題名の自立とは、ご主人の他界という不幸から立ち直り、炭と生け花のアートで成功した松尾さんの生き様を象徴したものの。ただしナレーションを聞き漏らすとその意味は判りにくい。

10. 熊野古道霧の里

5分35秒 江村一郎さん

秋から冬にかけて晴天の朝は川霧の立ちやすい季節。朝早く山に登って川霧を見おろすとき、それが逆光なら運が良ければ天上の世界のような光景に出くわす。残念ながらこれはその反対を向いていた。しかし作者の映像感覚には卓越したものを感じる。とくに移動撮影された映像の使い方がうまい。そしてもうひとつは音楽にある。奈良の大字陀に住む作曲者の東祥高はいつも付近の寺院や山河をイメージしながら曲を作る人だ。この選曲は正解と思う。撮影会の平安の女が出てきたのは意外だった。

11. 東大阪市子ども会大会

10分 岡本至弘さん

子供たちが踊る舞台を撮影したものが、客席の最後部から1台のカメラではアップも撮れずどうにもならない。こんなときに必要なのは撮影協力者と複数のカメラだ。

今月は例会場がいつもの阿倍野市民学習センターから、難波の市民学習センターへと変更になった。来月からは梅田の生涯学習センターで例会を行うこととなったので、ここ難波の会場は最初で最後となった。閉会後は、喫茶組と一杯組とに別れてそれぞれ二次会を楽しんだ。

■今月のインターネット作品

江村一郎作品「熊野古道霧の里」です。

■インターネット情報

ネット版ニュースをご覧ください。